神奈川大学人文学会五〇年史に代えて

十年の回顧

草　薙　正　夫

われわれの人文学会が創設されたのは、昭和二十八年秋であるから、今年で満十年を迎えたわけである。十年ひとむかしといわれるからには、十年という歳月は決して短いものではない。しかしまた光陰矢の如しのたとえもあるように、またたくまに十年が過ぎ去ったようにも感じられる。このような忽忙の感じは、学会の過去十年の活動と発展のスピードが目覚しかったことによるのかも知れない。学会の生誕と歩みが同時に、新制大学としてのわれわれの大学の生誕と歩みであるということも、私にとっては深い感慨を催させるものである。

学会の生誕は、新制大学としてのわれわれ大学の発足よりは三年遅れている。しかし法経学部と工学部の二学部しかもたない大学でわれわれのような特に精神科学の研究を中心とする学会、しかも相当強力で規模の大きい学会をもつことができたということは、おそらく他の大学には見られない稀有のことであろう。このことはわれわれの大学の誇りであり、特徴を示すものであって、他大学に教鞭をとる人々から屡々羨望の眼をもって見られるところ

でもある。そこで十年の回顧において、いまこのような事情をはっきりと記憶に甦らせておくことは、意義のあることだと思われるのである。

新制大学の発足に当って、特に法経学部の学部構成に関して、私もその議に参加した一員であるが、学部の内容や性格をどのようなものにするかという問題について、私は次のような提案を行なった。それは過去の東京の商科大学の特異な性格に倣って、学科編成を単に法経の専門的学科にのみ限定しないで、学生の希望に応じて広く哲学、文学、歴史などの諸精神科学を学ぶことができるような学科組織を造って、本学の教学に特色をもたせることにしたい、ということであった。幸にして本学においては、専門学校時代から一橋出身の先生が比較的多かったせいもあって、私の提案は容易に容られることになり、これらの精神科学に関するゼミナールも設置されることになったのである。われわれの人文学会が、このような本学の学部別設の趣意に従って生れたということは、忘れてはならない大切なことだと、私は思う。このような趣旨に従って、新制大学の発足以来、現在学会の中心的な存在として活溌な研究業績をあげておられる大家や新進気鋭の士が続々として本学に就任してこられることになった。学会はこれらの諸先生の熱意と努力によって、多少のいきさつはあったにしても創設せられたのである。それとともにわれわれが忘れてはならないことは、学長がわれわれの学会の創設に非常な同情と熱意を示されたことと、当時法経学部の学部長の重責を担っておられた故園田先生や故西垣先生が、大学における精神科学研究の重要性をよく理解せられて、人文学会の設立に外部から有力な支持を与えられたということである。もし学長のよき理解とこれら諸先生の援助とがなかったとしたならば、学会の生誕はもとより、今日までの成長は、とうてい得られなかったことと思われるのである。この機会にわれわれは、これら諸先生に対して感謝の念を新たにするものである。

学会創設の翌年から学会誌「人文研究」が発刊せられて、諸先生の優れた研究業績が続々と発表せられて、本学における人文科学研究の成果を、学外の諸学会や大学に対してなど広く世に問う機会を得るとともに、学生諸君も、講義の他に、諸先生の生々しい研究に接する機会を得ることになった。学会誌の発刊と、学内における月例研究会が、われわれの研究欲を刺戟し、新しい研究業績を生む結果となったことは、いうまでもない。これらの研究業績が、山本新博士や信太正三博士の学位論文として結実したということは、特筆すべきことであって、私もこのような恩恵に浴することができた一人として、深く感謝しているものである。今後も学会誌が、このような任務を果たすためにも、益々活用されることを期待してやまない。私のことといえば、学会の発足以来今日まで、私は学会委員長という重責をけがしているわけであるが、これは全く私の本学就任が古いということによるだけであって、私自身自ら格別の働きをしてきたわけでなく、顧みて慚愧に堪えない次第である。

こういうわけでわれわれの学会誌は、号を追うに従って、漸次内容を充実してきて、学外の諸学会の注目をひくようになってきた。われわれの学会誌に発表されたいくつかの論文が、全国的な諸学会誌に取りあげられて紹介、批判されたという事実が、このことを雄弁に物語っている。

このように諸先生の研究成果は、年三回刊行されるわれわれの学会誌でその都度発表されてきたのであるが、それ以外に学会は或る共通のテーマについてのわれわれの共同研究や、学術上極めて高い価値をもっているが、それが専門的であるために商業上出版の困難な外国の名著の翻訳を、学会自身の手によって出版する計画を立てて、すでにそれを実行してきた。神奈川叢書という名称で創文社から刊行された、アルフレッド・ウェーバーの「文化社会学」（昭和三十三年）と、われわれの共同研究による「伝統と変革」（昭和三十六年）の二著がそれであって、特

に前者は、社会学専門の人々から好評をかちえたものである。この叢書には、目下のところの近く刊行されるレーヴィットの「世界史と救済の出来事」の他、「現代の歴史観」、「西洋思想の移植」、「実存的作家論」などの共同研究やその他翻訳物の刊行が続々計画されている。これらの研究著作はおそらく、学会一般に対して、少からざる貢献をもたらすものと、われわれは期待しているのである。

これら学会誌や単行書による研究発表の他に、学会委員相互の月例の研究会や特に学生を対象とする学内講演会（この講演会の講師には本学の諸先生の他、学外から多数の知名の学者が招聘されているによる）研究活動は、別稿の年表についてみられるように、極めて活溌なものであった。その他学会は、学外において一般市民のために公開講演会を、年一・二回開催してきた。この公開講演会は、本学の教授の他に学外の知名な学者や文化人を招聘する例になっているが、それは横浜市内だけでなく、神奈川県下、たとえば平塚市などでも行なわれ、一般市民に非常に歓迎されている。ドイツの大学などでは、大学教授は毎年大学において、市民のために公開講義をする義務を負わされているが、それは、大学が学問研究を通じて社会に寄与する義務を負わされているからに他ならない。われわれの学会が、市民のための公開講演会を催すのは、このようなヨーロッパの大学の伝統に倣っているものであることは、いうまでもない。

以上述べてきた学会活動の歩みは、教授・助教授・専任講師である学会委員の研究活動のそれであったが、学会はその会員として法経学部学生全体を包含するものであるからして、学会の研究活動はこれら学生をも対象とするものでなければならない。そこで学会は、学生自身の研究活動を刺戟し活溌ならしめる目的のもとに、昭和三十二年に、学会の中に教授グループの研究部会の他に、「学生研究部会」を創設することになった。この部会には学問

研究上必要な経費を、学会から支出され、その中心的母体は、人文科学系のゼミナリストによって構成されている。この学生部会の設立によって、学生自身の研究活動は、年を追って活溌になりつつある。昭和三十六年にその研究発表のための年誌「世代」第一号が創刊され、最近その第三号が刊行されたが、その内容の急速な向上と充実が、その実情を物語っている。この学生部会の設立と「世代」の刊行は、最近創刊された商経法学会に所属するゼミナリストのための機関誌「神奈川論叢」の刊行とともに、両学会相携えて本学会における学生諸君の学問研究の意欲を益々全体的に強めてゆくものと期待されるであろう。

以上私は人文学会の過去十年間における歩みと、その業績を回顧的に略述してみたのであるが、私はわれわれの過去の歩みに、必ずしも満足しているわけではない。「人文研究」を季刊にしたいというわれわれの願望も、まだ実現されていないし、人文科学関係の教授スタッフも十分ではないし、（われわれの予定した計画が、予定通りに進行しないのも、大部分はスタッフの不足に原因しているように思われる）またできれば、工学部のジュニア・コースの学生を、人文学会の会員として包含もしたいのである。しかしこれらの問題は、学会の委員諸君の将来の努力に期待したい。ただ最後に私は近い将来の明るい見通しについて報告しておきたい。それは学内における或る委員会の席上において、非公式にではあるが、学長が近い将来において、大学院の設置と略々時を同じくしてか、或いはやや遅れてか、外国語学部創設の意のあることを漏らされたことである。もちろんその具体的内容に関しては、現在全く未定のことに属する。しかし外国語学部といえば、一般に人文科あるいは教養科の学科課程と貿易学科課程（何れも仮称）の学科課程の併置が、当然予想されるし、われわれはまたそれを強く希望したい。そこで、もしこのような希望が実現されると仮定するならば、われわれの学会は、劃期的な飛躍の段階に際会し、いま述べたよ

うな学会現在の不満の諸点も解消するに相違ないであろう。

何れにしても、創設以来過去十年間に、人文学会の基礎らしいものが、曲りなりにも出来上ったといえるのではないだろうか。この基礎の上に、どういう家作りがなされるか、未来に夢を托しつつ、この短い回顧録を終ることしたい。

（『人文研究』第二四集、一九六三年より再録）